

<第3レポート>

米帝国主義の頭目＝オバマを打倒しよう！全世界の労働者・学生の団結で戦争をとめよう！
世界から核と戦争をなくす共同の闘いとともに立ち上がろう！

2010年3月4日

アメリカ・カリフォルニア州のみなさんに、連帯のあいさつを送ります。

今、民営化と戦争に立ち向かう新しい労働運動・学生運動が世界中で生まれています。闘いに立ち上がった多くの労働者・学生が、この社会を根底から変革する新しい運動と組織のあり方を必死で模索しています。

私たち全学連もまた、日本の地においてそうした挑戦を続けてきました。私たちが主に闘いを通じてつかんできたことは、ひとつは、学生の持つ団結の力と可能性は無限であるということです。ふたつには、団結を守り、拡大していくためにも、鮮明な世界観と時代認識を持った政治的指導部の形成が絶対に必要だということです。私たちは、いかなる時代に生き、いかなる敵と闘っているのか。人間から自由と生存条件を奪っているものは何であり、これを変革する条件は何なのか。こうした問題を考え抜き、「人間解放」というとことんラジカルな立場から現代世界の矛盾的構造に対決し、一つひとつの闘いの方針をうち出していけるような指導部を、私たちは現場の闘いを通じて形成してきました。

以下のレポートは、そうした観点から、私たち日米の学生が連帯を深め、共同の闘いとともに創りあげていくために、相互に建設的な討論を開始していく第一歩として提案するものです。

【1】米帝国主義の頭目＝オバマを打倒しよう！

はっきりさせたいことは、日米、そして全世界の労働者階級の団結した力で、今こそアメリカ帝国主義の頭目＝オバマを打倒しようということです。

オバマの階級の本質は、資本家階級の代理人に他なりません。その使命は、アメリカと全世界の労働者の犠牲の上に資本の支配を再建することであり、そのために戦争をも辞さないことにあります。

オバマは米国の大失業の解決策として「輸出倍増」をうち出し、世界市場・勢力圏の再分割に乗り出すことを宣言しました。これはアメリカと他国の資本が、1930年代のように相互撃滅型の争闘戦に突入するだけでなく、何よりもアメリカの労働者と世界（特に日本）の労働者を互いに対立させ、分断し、国際連帯を破壊することを宣言しているものです。私たちは、これを絶対に許すことはできません。

オバマ政権が、アメリカ帝国主義の歴史的没落の果てに登場した政権でしかない以上、労働者階級のとるべき立場は、オバマの「変革」なるものに幻想を持つことはではなく、命脈の尽きた資本主義もろともオバマを打倒することです。

すでに、アメリカ労働者・学生の先進的闘いによってオバマ幻想は急速に崩壊しつつあります。しかし、一方で米国の既成労働組合幹部がオバマ支持と自国資本防衛を組合員に強制している現実があり、他方で日本においても日本共産党を先頭とする勢力が全力でオバマ賛美運動を組織しています。われわれは、これをうち破り、オバマ打倒の国際的闘争を創りださなくてはなりません。そして、全世界の労働者・学生がオバマ打倒に向かって団結し、国際連帯の絆をとり戻したいと考えます。この闘いの先頭に、私たち日米の労働者・学生が立ちましょ。

とりわけ、イラク・アフガン侵略戦争を1日も早く止めなければなりません。さらなる戦争の拡大は、間違いなく、核兵器を使った恐るべき大虐殺をくり返すことになるでしょう。この戦争を阻止する展望

は、われわれの団結した行動の中にこそあります。

【2】沖縄米軍基地をめぐる闘い

現在、日本において、沖縄の米軍基地問題をめぐるかつてない政治的危機が生じています。「普天間基地即時閉鎖！ 辺野古への新基地建設絶対反対！」—沖縄全島には怒りの炎が燃え立っており、米軍基地の全面撤去を求める巨大な闘いが巻き起こっています。

既成の政治勢力は、「オバマと鳩山に任せておけば基地はなくなる」と幻想をあおり、人々の怒りの声を慰撫しようと必死になっています。しかし、オバマはあくまで辺野古への新基地建設を主張し、鳩山政権は「沖縄の意志を斟酌してやる必要はない」と言い放って5月にも新基地建設を決定しようとしています。激突は不可避の情勢です。

沖縄は、アメリカの対アジア軍事戦略にとって「キーストーン（要石）」と呼ばれる重要な位置をもっており、ベトナム～イラク戦争に至るまで最重要出撃拠点として使われてきました。現在、オバマが進める米軍再編などの新たな軍事戦略にとって、辺野古への新基地建設は絶対条件となっています。また同時に、沖縄の米軍基地は日米安保軍事同盟の最大の実体でもあります。

だからこそ、戦争を止め、日米の帝国主義を打倒していく闘いにとって、沖縄の米軍基地建設阻止・基地撤去の闘いは決定的な位置をもっています。「基地の島」を強制されてきた沖縄の怒りも爆発寸前です。日本の労働者・学生は、長らく本土と沖縄に分断されてきた現実をのりこえ、団結して壮大な反戦・反基地闘争に立ち上がろうとしています。さらに、日米の労働者・学生が団結し日米安保粉砕の闘いに立ち上がるなら、必ず戦争を阻止することが出来ます。

ここで簡単に、沖縄の戦後史について触れます。太平洋戦争当時、沖縄は日本において唯一地上戦が戦われた場所でした。天皇および旧日本軍は、米軍の本土上陸を長引かせるために沖縄を「捨て石」とし、全住民を総動員して凄惨な玉砕戦を命令しました。終戦後、天皇はGHQ総司令官・マッカーサーに書簡を送り、沖縄を半永久的に米占領下に置くことを要請するかたちで、自らの政治的延命のために沖縄を売り渡したのです。

以後、沖縄は日本から分離されて過酷な米軍政下に置かれ、「基地の島」とされました。沖縄の人々は米軍基地撤去・祖国復帰を要求して何度も立ち上がりました。その中軸を担ったのは労働組合であり、基地労働者のストライキを中心に激しい闘いが巻き起こりました。本土においては、青年労働者や学生たちがベトナム反戦闘争と一体で安保・沖縄をめぐる実力闘争を展開しました。

この時、全学連は「米軍基地撤去＝沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒」のスローガンを掲げて本土・沖縄を貫く大衆的実力闘争を巻き起こしました。この闘いにおいて、全学連のリーダーであった星野文昭さんは無実の「罪」を着せられ、現在まで35年もの長期投獄を強いられています。不屈の獄中闘争を闘う彼の存在と闘いは、多くの闘う労働者・学生に感動と勇気を与えています。

1972年5月15日、沖縄は日本に「返還」されますが、これは米軍基地付きのペテン的「返還」でした。米日両政府は、「返還」と称して基地の永久固定化を図るという歴史的犯罪を行ったのです。今日もなお、5・15はこの「基地付き返還」への怒りの声を結集する県民大会が毎年開催され、8・6ヒロシマと並ぶ日本の反戦闘争の日として闘いが続けられています。

その後、1995年の米軍兵士による少女暴行事件を転機に、基地撤去を要求する島ぐるみの闘いが爆発します。しかし、米日両政府はこの要求を逆手にとって「普天間の代替施設を建設する」と表明し、名護市辺野古への新基地建設が計画されました。

沖縄の人々は新基地建設阻止に立ち上がりました。全学連は、全国の学生に呼びかけて辺野古現地に

常駐し、海上での実力阻止行動を闘い、今日まで沖縄の人々とともに新基地建設を阻止してきました。

今や沖縄は、「世界革命の火薬庫」です。全学連は、いよいよ決戦をむかえる沖縄闘争（5月沖縄現地闘争）に総力で立ち上がり、新基地建設阻止・日米安保体制打倒に向かって闘う決意です。

【3】ヒロシマ・ナガサキ反戦反核闘争の課題

沖縄の闘いと並ぶ、戦後日本の反戦闘争の二本柱が、ヒロシマ・ナガサキの反核闘争です。これは戦後最大・最長の反戦闘争であり、毎年多くの労働者・学生が「ヒロシマ・ナガサキをくり返すな！」のスローガンのもと、広島・長崎に結集し、反戦・反核の決意を固めてきました。

このヒロシマ・ナガサキの闘いが、今、重大な試練に直面しています。それは、既成の反戦反核運動の指導部（一部の労働組合幹部・日本共産党・秋葉広島市長など）が、オバマのプラハ演説（09年4月）を「核兵器のない平和な世界をめざすもの」と大絶賛し、ヒロシマ・ナガサキの闘いをオバマ応援運動にすり替えようとしていることです。これは「労働者・学生の団結で戦争を止め、核兵器をなくす」という反戦反核闘争の階級的精神を否定するものであり、これと一体で北朝鮮への排外主義的なパッシングが組織されています。

オバマのプラハ演説は、原爆投下を居直り、米国が「核強国」であることを誇示し、核兵器の独占と使用を公然と宣言する内容であり、断じて許しがたい核戦争宣言です。

そもそも原爆投下とは何だったのでしょうか？ 1929年世界大恐慌がもたらした資本主義の危機を世界革命へと転化できなかった結果、人類は第二次世界大戦の惨劇の歴史を経験しました。そしてそれは、労働者人民を無差別に虐殺するヒロシマ・ナガサキへの原爆投下へと行き着きました。アメリカ帝国主義は、第二次大戦終結後の世界において、ドルを基軸通貨とした世界支配体制を構築するため、米国の圧倒的な軍事的優位を示す目的で原爆投下を強行しました。核開発とその使用は、資本主義の危機と歴史的に一体であるということです。私たちは、時の米国大統領ルーズベルトが、口先では「軍縮」を叫びながら、経済危機からの脱出口を戦争に見出し、極秘で原爆開発を進めていたことを想起します。

戦後、米国は核軍事力の強大化を通じて世界支配を維持してきました。これに対し、旧ソ連や現在の中国、北朝鮮などは、労働者階級の力と闘いを否定するスターリン主義の本質ゆえに、アメリカの軍事的圧力に核武装をもって対抗する道に走りました。スターリン主義の核武装は、彼らの反労働者的な体制を維持するための絶望的な策動であり、帝国主義陣営の核武装を正当化する格好の口実を与えてきました。今や米日帝国主義は、北朝鮮をターゲットに排外主義と戦争策動を激しく強めています。

帝国主義とスターリン主義の支配の下で、核によって分断されてきた歴史を清算し、国境をこえた国際的な労働者・学生の団結を今こそとり戻そう。核兵器を含む膨大な大量破壊兵器を保有し、行使することによって、自らの地位と財産とを守ろうとしている一握りの資本家階級の手から、一切の武器を奪おう。それができるのは、国際的に団結した労働者階級に他なりません。

すでに、階級的な立場に立ちきれない一部の勢力は、自国の政府や資本家階級と対決できず、日和見主義から排外主義へと転落し、「オバマ翼賛・北朝鮮弾劾」の大合唱を始めています。これに対決し、私たちは、階級的労働運動を軸に据えた新たな反戦反核闘争の創造に取り組んできました。一昨年は、アメリカで募兵官追放の闘いを取り組む教育労働者アーリーン・イノウエさんが、そして昨年はILWUローカル34のホアン・デルポソさんが、この8・6ヒロシマの闘いに参加し、画期的な国際連帯を実現しました。

【4】労学共闘の闘いを通じて、新たな労働者党の建設へ

全学連を中核とした日本学生運動は、常に反戦闘争の先頭に立ってきました。これは、「大学を二度と戦争の道具にさせない」という学生自治の闘いと一体でした。日本の国家権力は昨年、全学連指導部をはじめ8名の学生を不当逮捕、長期勾留する大弾圧を強行しました。これは、鳩山政権が憲法改悪（第9条破棄）を主張し、日本の戦争国家化・核武装化を狙う動きと一体でした。しかし、私たちは労学共闘の力でこの弾圧をうち破り前進しています。

私たちの武器は、「労働者階級の解放は労働者自身の事業である」というマルクス主義の思想と路線でした。学生もまた労働者階級の一員であり、誇り高い社会変革の主体です。労働者階級のもつ力と可能性に確信を持ち、現場の闘いを通じて鍛えあげられた指導部は、どんな弾圧にも屈することはありません。法大闘争を通じて若きリーダーが次々と生み出され、新しい革命的労働者党を建設しています。この党はマルクス主義で武装され、労働者自己解放の原理を現代世界において表現する、反帝国主義・反スターリン主義の綱領をもった労働者党としてあります。

戦争を阻止し、世界大恐慌をプロレタリア世界革命＝人間解放に転化するために、アメリカの労働者・学生のみなさん、ともに闘いましょう！